
little honey

蒼真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

little honey

【Nコード】

N3910Z

【作者名】

蒼真

【あらすじ】

ごくごく普通の高校生である俺、高村佑樹。

勉強もスポーツも容姿も平均程度。特技らしい特技もない。

それゆえ、これまでモテた経験はない。

しかし、そんな俺がある日突然、情熱的な愛の告白を受けたのだ。

本来なら嬉しくてたまらないはずなのに。

俺は素直に喜ぶわけにはいかなかった。

なぜなら、その告白をしてきた少女は……。

高校生の少年を主人公としたラブコメディです。
他サイト「アットノベルズ」にも掲載しています。

第1話〈突然の告白（前書き）

勉強もスポーツも容姿も平均並みの高校生の少年が、ある一人の少女に

好かれてしまうラブコメディ。

シリアスな部分もありますが、基本は明るい話を目指しています。

第1話／突然の告白

「あなたが好きなの・・・」

うるんだ瞳。情熱的な愛の告白。

その熱を含んだ視線は俺をしっかりとからめとっているようで、身動きができなかった。

それを知ってか知らずが、その少女は俺に体をぴったりと寄せている。

俺はこれまで女の子にモテた経験はない。

恥ずかしながら、重ねたきた年齢の数だけ彼女がいなかった。

彼女いない歴17年。

それほど変な男だとは思ってはいないが、いわゆる『モテる男』ではない。

それはハッキリと自覚している。

この世には生まれつきモテる奴とモテない奴がいることぐらいよくわかってる。

そんな『モテない男』である高村佑樹が情熱的な愛の告白をさされているのだ。

それまで何度も頭の中で描いていた（妄想していた）理想的なシチュエーション。

夢にまで見たその状態は、狂喜乱舞とっていいぐらいの嬉しさだろう。

本来ならば。

自分とさほど変わらない年齢の少女、または年上のキレイなお姉様であったのなら

その場で踊ってみせてもいいぐらいの嬉しさだったと思う。

そう、俺はこの状態を素直に喜ぶわけにはいかなかったのだ。

なぜなら・・・

愛の告白をしてきた少女は・・・

・・・まだ幼稚園児の女の子なのだから・・・。

第2話 その少女の名は美月

「あ、あのね、ちょっと落ち着こう？ 美月ちゃん・・・」

体をぴったりと寄せ、潤んだ瞳のまま俺を見上げている6歳の少女。

その目は恋した女たちと何ら変わらない（のような気がする）から驚きだ。

「どうして・・・？」

みずきが佑にいちゃんのこと、『すき』っていつでも信じてくれないの・・・？」

いや、信じる信じない以前に、この状態はまずいだろっ！

6歳の幼女が高校生の男の体の上に乗っかるようにして、愛の告白をしているのだから。

早く俺の上からどいてくれ！とストレートな言葉が口から出かかったが

俺は必死にそれを飲み込んだ。

そのまま言えば、美月ちゃんを深く傷つけてしまっただろうから。

「いや、その・・・美月ちゃんのことを信じないわけじゃないんだよ。

ただ・・・その・・・俺も男だからさ・・・。

男として、こんな状況を軽々しく受け入れるわけにはいかないっというか・・・

え〜っど・・・と、とにかく、一旦離れよう？」

幼女に対して言い訳めいた釈明をしつつ、俺は倒れかけた体を起こし

美月ちゃんを肩を掴んで、そっと俺の体から引き離れた。

あまりに不自然なその状態から少しだけ抜け出せて、やっと落ち着いて呼吸ができる気がする。

しかし、状況が変わったわけではない。

あの真剣な眼差しから考えて、美月ちゃんが嘘をついているとは考えにくい。

いや、いつそ嘘であつてくれたほうがどれだけいいか。

おそろおそろ美月ちゃんの様子を伺えば、うつむいて肩を震わせている。

泣かせてしまったのか・・・？

しかし真つ当な男なら、幼女からの告白を受け入れるなんて出来ないはずだ。

(一部の男は大喜びなのかもしれないが)

うつむいた美月ちゃんからやがてすすり泣く声が聞こえ出した。

やっぱり泣いている・・・。

「あ、あのね、美月ちゃん・・・」

告白を受け入れることはできなくとも、幼女を泣かせてしまうのはなんとも気分が悪い。

なんとかなだめたいが、いつものように頭を撫でてやってもいいも

のかどうか。
それさえ悩む。

俺は一体、どうしらいんだ……。

頭を抱え込むようにして悩んでいると、美月ちゃんが先に言葉を発した。

「佑にいちゃん、みづきの思いをわかってくれないだ……

みづき、まだ小さいけど本気だよ？

前にテレビで見たもの。

すごく歳の離れた男の人と女の人が結婚していたりするよ？」

いや、それは両方が大人だから許されるのであって。

たしかに芸能界だとかでは、かなり年上の男（熟年）と若い女性が結婚していたりする。

それは嘘ではない。本当のことだ。

しかし、相手が幼女で、しかもその幼女の想い人が高校生だなんて……。

そんな恋愛、あるわけがない。

妄想の世界ではあるのかもしれないが、現実であってはいけないことだ（と思う）。

「あのさ……美月ちゃんが俺のことを『好き』って言うってくれるのは嬉しいよ？」

でもね、それを簡単に受け入れるわけにはいかないんだよ。

俺にとって美月ちゃんは……家族のような大切な存在だからいい加減に扱いたくないんだよ。

そのところ、わかってくれる？」

「みづぎのこと、大切なの？」

すすり泣いていた美月ちゃんの涙が止まった。

よしっ！泣き止んだぞ・・・

「そうだよ、美月ちゃんは『大切な子』だ」

再び泣かせたくなくて、慌てて言葉を続けた。

「うんっ！ みづぎにとっても佑にいちゃんは『大切な人』。

佑にいちゃんにとってもみづぎは『大切な子』

だったら、二人は『両思い』だねっ！」

・・・どうしてそういう解釈になるんだあゝ！！

「うれしいなっ 佑にいちゃんとみづぎは両思いっ」

美月ちゃんはまるで歌うかのように、ご機嫌でつぶやいている。

「じゃあ、またね〜。佑にいちゃん。

明日もまた、みづぎと遊んでね！」

軽やかなスキップで俺の部屋を出ていく美月ちゃん。

あまりな展開に呆然としている俺を一人残して。

第3話〜少女との出会い

現在幼稚園児の美月ちゃんが隣に引越してきたのは、およそ4年ほど前のことだった。

当時、俺は中学生。

外資系の証券会社に勤める父親と品の良さそうな母親、そして一人娘。

父親は仕事が忙しいらしく、家を空けがちで、あまり顔を見たことがない。

たまに顔を合わせることもあっても、俺の挨拶を軽くスルーしてくれるので

正直あまりいい印象はない。

母親のほうは、近くに誰も知る者がいない地域に越してきたようである俺の母を何かと頼るようになり、いつしか年代は違つのにすっかり打ち解けていた。

二人でよく長話をしているので、一人になった美月ちゃんは自然と俺が面倒をみるようになった。

『俺なりの事情』もあり、小さい女の子には努めて優しく接してやろうと思ひ

よく一緒に遊んであげた。

一緒に公園に行ったり、お人形さんごっこに付き合ったり、子供向けDVDと一緒に見てやつたり。

それなりに楽しいこともあるが、所詮は幼女のお守り。

時折面倒になることもあったが、小さな美月ちゃんは俺を『佑兄ちゃん』と呼んで

よくなつき、俺の顔を見ると嬉しそうに飛びついてくるので悪い気

はしなかった。

遊び疲れると床の上で寝てしまうことがある(幼児ってのは突然寝てしまうらしい)
そのままにしておくわけにはいけないので、俺のベットに運んで寝させてやったりもした。

そんなわけで、実の妹でもないのに、すっかり美月ちゃんの『良
いお兄ちゃん』
となった俺だった。

そんなある日のこと。俺は自室で学校の宿題のレポートをまとめ
ていた。

美月ちゃんは遊び疲れてお昼寝中だ。

ところが、俺のベットですやすや寝ていた美月ちゃんがぐずぐずと
泣き出した。

悪い夢でも見ているらしい。

以前にも何度かこういうことがあり、初めてのときはどうしていい
のかわからなくて

慌てて母のところへ飛んで行って報告し、どうすればいいのか相談
した。

母曰く、幼児というのは眠りから覚める前後で見る夢に驚いてう
なされたり

いきなり目覚めたことで、ちょっとしたパニックになったりするら
しい。

だから、そんなときはそっと抱きしめるように体を支え、背中をさ
すってやったりして

スキンシップをとりながら、大丈夫だよ、と声をかけてやれば自然と落ち着く、とのこと。

母に言われた通りの方法で対応すると、美月ちゃんは落ち着くことがわかったので

俺はその日も同じように対応した。

そつと抱きしめて、背中をさすり

「大丈夫だよ。怖いものなんて何もないから。俺がついてるよ」と声をかけた。

これで落ち着いたのだ。それまでは。

しかし、その日は美月ちゃんはそれだけでは落ち着かず、俺に勢いよく抱きついてきたのだ。

予想していなかった美月ちゃんの行動に俺は体のバランスを失い、ベットに倒れたような

格好となった。

そこに冒頭の『愛の告白』があったのだ。

正直、青天の霹靂と言ってもいいぐらいの出来事だったが

落ち着いて考えてみれば、あれは美月ちゃんが寝惚けていたのかもしれない。

うん、きつとそつだ。

昼寝から覚めた直後だったのだから、悪い夢でも見てうなされ、寝惚けてしまったのだ。

そつだ、そつに違いない・・・

明日からどうやって美月ちゃんに接していいのか悩んでいたが『寝惚けていた』という結論に達してから、俺の気持ちはすっかり落ち着いていた。

明日になれば美月ちゃんはきっと今日のことは忘れているだろう。だって寝惚けていたのだから。

そう思いながら、残った宿題を片付けて、晴れやかな気持ちでベツトに入り、眠った。

明日になれば全て解決している、とそう信じて。

しかし、その解釈はとても甘いものであったことを翌日になって俺は思い知らされるのである。

第4話／まさかの展開

「こ、こんやくうう！？」

翌日、俺が学校から帰宅し、小腹が減ったので何かないかと冷蔵庫を

あさくっていたときのこと。

母さんが事も無げに言ったのである。

「お帰り、佑樹。

そうそう、アンタとお隣の美月ちゃん、『婚約』することになったから」

「あ、そう『婚約』ね……。

……って、ちよつと待て！

『婚約』って何だよっ！？」

俺は驚嘆して、冷蔵庫から出したばかりのコーラ缶を足の上に落とし、

驚くやら痛いやらでわけがわからない。

「何もそんなに驚くことないじゃない。

『婚約』と言っても、ちよつとした形式だけよ。

美月ちゃんを喜ばせてあげたいの。

美月ちゃん、アンタのこと、王子様が何かに思ってるみたいだし。

私から見ると、じみ々な高校生なんだけどねえ。

まあ、あのぐらいの女の子って年上の男の子に妙に憧れたりす

るしね。

「そんなわけで、いいわね」

「何がいいというのか。」

「美月ちゃんママの琴子さんも大賛成でね。」

「以前からアンタのこと褒めて、大層気に入ってくれてたみたいだし。」

「何より『美月が喜ぶわ!』って嬉しそうだったしね」

「ちょ、ちよつと待て・・・」

「何よ、何か文句でもあるの?」

「大有りだよっ!」

「なんだよ、『婚約することになったから』って。」

「まるでどこかに旅行に行くみたいないな気軽な言い方は。」

「大体、俺の意志はどうなるんだよっ!」

「なに、ムキになってるの?」

「だから『ちよつとした形式だけ』って言ってるでしょ。」

「二人で並んで座って、簡単な書類みたいなものにサインして、」

「写真撮るだけよ」

「『形式だけ』つってもマズイだろうっ!」

「高校生と幼稚園児なんだぞ!」

「世間はどう捉えると思うんだよ?」

「そもそも俺は美月ちゃんのこと、そんなふうに思ったことは一度もないぞ!」

「でも、アンタ、美月ちゃんに告白されて
『大切な子だよ』って応えたんでしょ？」

途端、昨夜の美月ちゃんに押し倒されたような形で告白されたことを思い出した。

幼女とは思えない真剣な眼差しの美月ちゃんを。顔が熱くなってくるのを感じた。

「み、見てたのかよっ!？」

声が裏返っていたが、母はそんなこと気にもしていないようだ。

「やゝね、覗くわけないでしょ。」

美月ちゃんから聞いたのよ。

『みづきと佑にいちちゃんは両思いなんだよっ!』って。

美月ちゃん、とつてもいい顔してたわ。

あの笑顔を何とか続かせてあげたいね、って琴子さんとも相談して

じゃあ、『ウチの息子と婚約でもさせてあげたらどうかしら?』
って

話になったのよ。

美月ちゃんね、今、幼稚園に行きたくないらしくて毎日元気が
ないの。

だから少しでも喜ぶことをさせてあげたいわけ。

アンタも少し協力しなさい、いいわね!」

「いいわけないだろうっ!」

俺は慌てて母の言葉を制した。

冗談じゃない、高校男児が幼稚園児と婚約なんてことになったら・

学校の奴らに知られたら死ぬほど笑われるし、女の子たちには口リコン扱いされてしまう。
ただでさえ、モテないのに。

「そう・・・お母さんの頼みを聞いてくれないのね・・・」

そう言うなり、俺をじっと見つめる母の目から涙がポロリと零れ落ちた。

どうせ、嘘泣きだ。それはわかってる。

だけど・・・

俺は母さんの泣き顔にはとことん弱い。

以前は泣いてばかりいた母がやっと泣かなくなったのだ。

少しでも泣き始めると昔に逆戻りしてしまいそうで、俺は慌ててしまふ。

母をそれを知っていて、ここぞというときに使う『作戦』なのである。

それはわかっているのだから・・・。

母さんの目からどんどん涙が溢れてくる。

その顔を見ていると、どうにも落ち着かない。

「わ、わかったよっ！

『おままごと』の続きか何かだと思っておけばいいんだろう？

その代わり、周囲の人間には絶対にバラすなよ」

途端、母は涙を拭きながらニツコリと笑った。

「さすがは私の息子。優しい子ね。母さん嬉しいわ。」

「じゃあ、近いうちに『婚約式』をあげるからそのつもりでね」

母の作戦にまんまとしてやられてしまった。

何でこうなるんだ……。

こうして俺は何の因果か、

『幼稚園児と婚約する高校生』になってしまったのである。

この先、俺は一体どうなるんだ……

第5話〜何でこっぴどくなる？

その週の土曜日。

俺は学校が休みだというのに、学校の制服を着ている、いや、着せられている。

そして家で唯一の和室で待っている。

誰かって？

お隣の幼稚園児・美月ちゃんだ。

美月ちゃんとの婚約式のために、俺は母さんにここで待つよって言われたのだ。

まったく、なんでこんなことになったのか・・・

釈然としない気持ちを抱えたまま、畳の上で寝そべっていると母さんが和室に戻ってきた。

後ろには、美月ちゃんと母親の琴子さんがいる。

「佑樹、待たせたね。」

・・・アンタ、なんて格好しているの。

もっとシヤンとしてっ！」

言われてしぶしぶ体を起こし、その場に正座した。

ふと目をやれば、美月ちゃんはフリルが沢山ついた白いワンピースを着ている。

まるでウェディングドレスのようだ。

照れくさそうに俯き加減で佇む美月ちゃんは、小さいけれど可憐な花嫁さんのようにも見える。

「佑樹、上座のほうに座りなさい。

さあ、美月ちゃん

佑樹の隣に座って」

促されて、俺はのっそりと上座へ進み、改めて正座した。

続いて美月ちゃんが俺の横に座る。

隣を見れば、美月ちゃんは恥ずかしげに顔を赤らめているが、とても嬉しそうだ。

この場を心底喜んでるのが伝わってくる。

「まあまあ、まるで雛飾りのお内裏様とお雛様みたいじゃないの！

ねえ、琴子さん。お似合いの二人よね」

母さんが脳天気な声をあげた。

お内裏様とお雛様にしては一方が小さすぎるような気がするが。

「美月……

本当に嬉しそうね……。

あの子のあんな嬉しそうな顔を見るのは久しぶりだわ……」

見れば、琴子さんは涙ぐんでいるようだ。

嬉しそうな顔を見るのが久しぶり……？

いや、俺と一緒にいるときは、いつもとても嬉しそうだけど……？

少し不思議に思ったので、琴子さんに聞いてみたくなった。

しかし、彼女もまた嬉しそうに、俺と美月ちゃんが並んだ姿をデジカメで撮っているのだ。

その場で質問できそうになかった。

「佑にいちゃん・・・」

隣から美月ちゃんの声。

その声に応じて顔をそちらに向けると、俺はドキリとした。

美月ちゃんの俺を見る目・・・それは少女というより『女』の目であつた。

艶めいた瞳。

幸せをゆつくりとかみしめているかのような、穏やかな微笑み。

姿はどう見ても幼女なのに、感じる雰囲気は『女』なのだ。

白い清楚なワンピースを着ているせいも、雰囲気も普段より大人っぽい。

今日の美月ちゃん、なんだかいつもと違う・・・

そう感じた途端、俺の胸が急にドクンドクンと音を立て始めた。

ん・・・？

なんだこれ・・・？

まさか、俺

幼女相手にときめいているのか・・・？

自然と顔が赤らんでくるのを感じ、俺は慌てた。

だって、相手は幼女だぞ？

俺はロリコンじゃない。

美月ちゃんは・・・俺の『妹』だ。

血縁関係は全く無いけれど、俺にとっては可愛い妹なのだ。

『妹』ということを意識すると、俺の心臓の音はピタリと止まり、平常に戻った。

そう、これでいいんだ……。

俺は美月ちゃんを『妹』として大切にしていあげなくてはいけないのだから。

『妹』は……大切にすべき存在なのだ。

一人自分の心と葛藤していた俺だったが、平常心に戻ると改めて美月ちゃんを見、小さく声をかけた。

「美月ちゃん、俺の母親が勝手なことをしてごめんね。ずっと正座して疲れない？ 足、崩してもいいんだよ？」

「ありがとう、佑にいちゃん。でも、だいじょうぶ。」

わたし、とっても嬉しいからがんばるの！」

第6話　誓い

そう健気に答える美月ちゃんの顔は本当に嬉しそうだ。

嫌々この場にいる俺はその顔を見ると、なんだか少し罪悪感を感じてうつむいた。

美月ちゃんは心底喜んでるんだな……。

俺、ホントにこんなことしていいのか……？

「さあさあ、写真だけじゃなくて、折角だから『誓い』を立てましょうよー！」

悶々とした俺の思いを吹き飛ばすような、母さんの声。

誓い……？

すると、母は立ち上がり床の間の小さな引き出しから上質そうな用紙とペンと朱肉を出した。

「ここに二人の名前をそれぞれ書いてちょうだいね」

用紙を見ると、そこにはこう記してあった。

『 今から十年後、私たちは結婚することを誓います 』

おいおいっ！

婚約だけじゃなかったのかよっ！

け、結婚って……。

いくら何でもやりすぎだろっ！

俺は慌てて母さんの体を小突いて、耳元に小さな声で抗議した。すると、母も俺の耳元でささやく。

「婚約式なんだから、将来を誓わなきゃおかしいでしょ？」

美月ちゃんを安心させてあげるためよ。

ちよっとしたお遊びだと思って、付き合ってあげなさい！」

美月ちゃんのためかよ……

俺の気持ちはどうでもいいのか？

母親を恋しがる年齢でもないが、息子のこととはどうでもいいと思っているかのような発言にはムカつく。

いつその場を出て行ってやろうかと思ったが、不安そうに俺を見つめる

美月ちゃんの姿を見てしまったのは、そうもいかなかった。

母に促され、俺はしぶしぶペンを取り、名前を書いた。

『高村 佑樹』

そして朱肉に親指を押し付け、その横に押す。拇印だ。

続いて、美月ちゃんも母親の琴子さんと一緒に用紙に名前を書く。

『あんどろ みづき』

まだ漢字を書けないから平仮名だ。
続けて拇印を押す。

「さあ、これで二人の署名・捺印も終わったことだし
婚約は成立したと考えていいわね。」

美月ちゃん、おめでとう！」

母さんの台詞の中には俺の名前は入ってない。
全く、俺のことはどう思っているんだか……。

「さあ、最後にもう一度写真を撮っておきましょう
と母さん。」

「うふふ、本当にお似合いの二人ね」
と無邪気に喜ぶ琴子さん。

うかれまくっているかのようなこの二人。

俺はこの二人の大人に完全に振り回されているらしい。
それがわかっているのに、抗議できない自分が恨めしい。

これで俺は本当に幼稚園児と婚約してしまったことになる。
(公にしているわけではないので、あくまで内輪だけだが)

ああ……

これから俺はどうしていったらいいんだ？
美月ちゃんにもどう接していったらいいんだろう？

一人悩む俺の側に美月ちゃんが寄り添ってきた。
驚いて見てみれば、俺にしだれかかるように寄り添っている。
それは大人の女性のようで・・・
本当に・・・
幼稚園児とは思えない。

「うれしいな・・・」

これで佑にいちちゃんはみづきの『こんやくしゃ』なんだね。
みづき、これからがんばっていいお嫁さんになるねっ！」

いや、頑張らなくていいよ・・・

そう言いたかったが、美月ちゃんの幸せそんな笑顔を見ると何も言えない俺だった。

幼女に甘い俺にも原因があるのかもしれないなあ・・・

そう思い、俺はそっとため息をもらした。

第7話〜修行？

婚約式の翌日。

その日の夕食のメインは木炭であった。

・・・ではなく。

どうみても木炭か、黒い埴輪にしか見えないハンバーグがメインだった。

『花嫁修業』と称して、美月ちゃんがこの日の夕食作りに参加しており

俺の分のハンバーグは美月ちゃん作った。
黒い埴輪にも見えるのは、『クマちゃんハンバーグ』にしたかったから、らしい。

たしかにハンバーグは俺の大好物だ。
しかし、いかに好物とはいえ、これはあまりにも・・・。
俺が真つ黒なハンバーグをみつめて言葉を失っていると、美月ちゃんが不安そうに声をかけてきた。

「佑にいちゃん・・・みづきの作ったハンバーグ、食べてくれないの・・・？」

そんな泣きそうな目で見られては何も言えない。

俺は覚悟して真つ黒ハンバーグを切り分け、口に放り込んだ。

ジャリジャリ、ゴリッ・・・

おそよハンバーグを食べている音とは思えない奇っ怪な音を感じながら
無理やりその物体を飲み込んだ。

「うん・・・おいしい・・・よ・・・」

美味いわけはないのだが、そう言うしかないじゃないか？

「よかった！たくさん作ったから、いっぱい食べてねっ！」

美月ちゃんは嬉しそうに笑う。

そうか・・・まだ沢山あるのか・・・。

俺のほうが泣きたいよ・・・。

ふと台所の隅を見れば、母さんが必死で笑いをこらえているのが見えた。

くっそ、人ごとだと思いやがって。誰のせいだと思ってるんだよ？

その後も美月ちゃんの手料理は続いた。

石にしか見えないガツチガツチの唐揚げやら、破裂してもはや何の料理かわからない餃子やら・・・。

大量の水を片手にそれらを必死に呑み込む日が続いた。

俺の胃袋は一体いつまでもつだろうか・・・。

「ねえ、佑にいちちゃん・・・。』お姫様だっこ』してほしいな・・・

「

その日も美月ちゃんの手料理を食べさせられて、ぐったりとソファにもたれて休んでいると

美月ちゃんがそっと近づいてきて俺にささやいた。

・・・お姫様抱っこ？

俺は何のことだかわからず考えこんでいたら、母さんが慌てて俺の側に来て言った。

「体を仰向けの状態のまま横抱きすることよ。

アンタが寝ちゃった美月ちゃんを運ぶときに使ってる抱き方、覚えてるでしょ？」

言われて、寝てしまった美月ちゃんを運ぶ光景が頭に浮かんだ。

あ、あれかー！！

そうか、アレを『お姫様抱っこ』というのか・・・。

「まったく、アンタは鈍いんだから。そんなことも知らないの？」

母に小馬鹿にされたが、知らないものは知らない。

しかし、なんで今さら美月ちゃんはその『お姫様抱っこ』をしてほしがるのだろうか？

よくわからないが、期待された目で見つめられては応えないわけにはいかなかった。

第8話　彼女のお願

美月ちゃんの御期待に応えるべく、彼女の背中と膝裏に手を伸ばしそっと抱き上げた。

美月ちゃんは心底嬉しそうな笑顔で、俺の腕に体を預けている。

そうか、世間ではコレを『お姫様抱っこ』というのか・・・知らなかった。

こんなもんがそんなにも嬉しいものなのか？

「ねえ、このまま佑にいちちゃんのお部屋につれてって！」

「・・・ヘイヘイ」

「ヘイヘイなんていわないで！『王子様』みたいに話してっ！」

さっきまで笑っていたのに、今度はぷりぷりと怒り出す。わけがわからない。

『王子様』って言われても、俺は王子様じゃなくて平凡な高校生ですから

どう話したらいいのかわかりませんよ・・・。

仕方なく、昔見た童話の世界の王子を必死に思い出す。

「では、美月様。わたしのお部屋に参りましょうか？」

「ハイ、王子様。よろこんで！」

なんとも珍妙なお姫様ごっこをしながら彼女を俺の部屋に連れていく。

DVD
美月ちゃんは俺の部屋にしまっただけある昔のアルバムや本やマンガ、

を見るのが好きなので、彼女が俺の家にいる日の夕食後は俺の部屋に行くのが

恒例になっていた。

（無論、Hな本やマンガは秘密の場所に隠してある）

俺は自分の宿題などを片付け、時間があれば彼女と遊んでやる。

たいしたことはしていないのだが、美月ちゃんはこの時間が一番嬉しいらしい。

母親の琴子さんが迎えに来たときにはすでに寝てしまっているときもあるのだ

その時は俺が美月ちゃんを抱き上げて、じゃなかった、『お姫様抱っこ』して

お隣まで連れて行く。

その日も俺は宿題をざっと片付け、手が空いたので美月ちゃんと遊んでやるうっ

振り返った。

すると、そこには美月ちゃんが立っていて、俺をじっと見つめていたのだ。

どこことなく寂しげな、訴えるような目線だった。

「ど、どうしたの？美月ちゃん。ずっとそこにいたの？」

俺の手が空くのずっと待ってたの？」

コクンとうなづく美月ちゃん。
見慣れないその表情に戸惑った俺はなんだか落ち着かない。

「い、一緒にアニメDVDでも見ようか？ 新作が手に入ったんだよ？」

「ねえ・・・佑にいちゃん・・・」

「ん？どうした？」

「あのね・・・わ、わたしに・・・して・・・」

「へ？ 何をしてだって？」

肝心な部分がハッキリと聞き取れず、思わず聞き返した。
とっさに彼女の方に耳を傾ける仕草をとる。

美月ちゃんは頬を赤らめながら、そつと俺の耳にささやいた。

「あのね・・・みづきに・・・キス・・・して・・・」

はあ、キスね。『キス』なんてタイトルのDVDあったかな。
いや、違う、美月ちゃんは『して』って言ったんだ。

『キスして』って。

キス・・・？ え、キスう・・・？

・・・な、なんだってええ〜!!!

第9話 嫌いにならないで

「ちょ、ちょっと待ってよ？ み、美月ちゃん。
ま、まず落ち着こう、ね？ ね？」

その前にまずはおまえが落ち着け、というところだが。
しかし、まさか幼女の口から『キス』なんて言葉が出てくるとは思
わなかったし

哀しいかな、ファーストキスの経験もない俺はその言葉だけで妙に
体が熱くなる。

「だって・・・両思いのオトコの人とオンナの人って『キス』する
んでしょ？」

佑にいちゃんのおばさまと一緒に見たおひるのドラマで出てきて
たよ。

あたしたち『こんやく』してるし、そういうことしないと・・・
ダメ・・・なんでしょ？」

バ、バカ母っ！

幼女に過激な昼ドラなんて見せてんじゃねーよっ！

心の中で思い切り母親に毒ついたが、今更叫んでもどうにもならな
い。

「あ、あのね・・・そういうのはあくまでドラマの話であって・・・
男女がそんな簡単にキスなんてしちゃいけないっていうか・・・
まして美月ちゃんはまだ小さいし、俺はその・・・美月ちゃんを
大事にしたいから

軽々しくそんなことしたくないんだよ。

「・・・言ってることわかる・・・？」

幼女に必死に弁明しながら、美月ちゃんの顔色をそつと伺うと目にもみるみる涙がたまってくる。

「でも・・・佑にいちゃん、前とはちがうもの・・・。

前みたいに遊んでくれないもの・・・。

みづきのこと・・・嫌い？

佑にいちゃんもみづきのこと、『いらない』っていつの？

佑にいちゃんがみづきのこと好きになってくれるなら

みづき、なんでもする。

みづきのこと、好きにしていよいよ？

だからおねがい・・・みづきを・・・嫌いにしないで・・・。」

言いながら大粒の涙をこぼす小さな少女。

この子は・・・必死なんだ。俺に嫌われないように。

相手が幼女とはいえ、そこまで想ってくれている人間がいることに俺の胸は自然と熱くなった。

俺も年頃の男だし、『好きにしていよいよ』なんて言葉が気にならないわけじゃない。

しかし、俺を想いながら目の前で泣いている純真無垢な小さな少女に何かしてやろうなんて気にはならなかった。

「美月ちゃん・・・俺は美月ちゃんのことを嫌いになんてなっていないよ。」

ただその・・・俺達は『婚約』しただろ？

美月ちゃんにどう接していいのか、俺にはよくわからなかったんだよ。

そのことで美月ちゃんの心を傷つけてしまったのなら……ごめん、謝るよ」

「あやまらないで。佑にいちゃん……。
ちがうの、あやまつてほしいわけじゃないの……
みづきのこと、好きになってほしいだけなの……」

涙が溢れる目を抑えながら、小さく首を左右に振る。
その姿はなんともいたいけだ。

「美月ちゃん……俺に何かしてほしいことある……？
その……キスとかじゃなくて……」

美月ちゃんは少しだけ顔をあげて俺のほうを見た。

「……『ぎゅっ』……して……」

『ぎゅっ』……？『ぎゅっ』って何だ……？

何のことだかわからず頭をかしげたが、美月ちゃんが俺の方に向か
って

両腕を精一杯伸ばしたので、おおよその検討はついた。

抱きしめてほしいんだ、美月ちゃんは。

俺は美月ちゃんの側によると小さな彼女の体を包むように、そつと
抱きしめた。

「佑にいちゃん……だいすき……。
みづきのこと、嫌いにならないで……」

そう言いながら涙をこぼしていた美月ちゃんだったが、やがて涙声は消えていき
代わりに安らかな寝息が聞こえ出した。
どうやら泣き疲れて寝てしまったらしい。

俺は小さく笑うと、そっと俺のベットに寝かしてやった。

こういうところはまだ子供だよな・・・

時折妙に大人びたことを言い、俺を驚かせるが、この子はまだ小さな子供なんだ。

でも・・・俺を想う気持ちは真剣なのかもしれない。

小さな少女でありながら、恋する乙女でもあるということだろうか・・・。

しかし、そんな相手に俺はどう接していけばいいのだろうか？

涙で腫れた美月ちゃんの目元をそっと拭ってやりながら、俺は一人悩んでいた。

第10話 相談しよう

「はぁ？ 幼稚園児と婚約っ！？」

「沢田、声大きい！」

ここは学校から帰宅途中のファーストフード店。

俺の目の前で奇声を発したのは、小学生の頃から付き合いのある沢田拓也。

沢田は朗らかな性格で人当たりが良く、目鼻立ちが整った顔をしているせいか

小学生時代からモテていた。

中学生の頃には年上から年下まで幅広く女の子と付き合いっていたよ
うだ。

俺と同じ高校に通うようになった今は以前より落ち着いているものの
相手には不自由していない、と豪語するほどだ。

俺とはエライ違いの男だが、そういったことを鼻にかけたりしない
ヤツだから気楽だし

何より俺とはウマが合うようで、昔も今も同じように友達の一人と
して付き合いがある。

俺の突拍子も無い相談に対しても笑ったりしない、いいヤツなのだ。

昔からモテている『モテ男』のコイツなら、女の子のことはよく知
っていると思い

悩みながらも思い切って相談してみたのだが……。

「ああ、悪い……。ちょっと驚いちまって。

なんだよ、何をどうしたら高校男児と幼稚園児が婚約、なんて事
態になるんだよ。」

「実はお前、いいところの御曹司だったとか？」

「そんなわけないだろ！」

「なんていうか・・・お隣の女の子となりゆきでそうなってしまったっていうか・・・。なんとなく断りきれなくてなあ・・・。」

「断り切れないって・・・。」

「いや、そこはなんとか断るべきだろ？ お前が真性のロリコンじゃないならな？」

「ん・・・そうなんだけどな・・・。」

俺が美月ちゃんとのことを強引に振り切ることができない理由・・・それが俺は沢田と話すうちになんとなく気がつき始めていた。

俺は沢田に美月ちゃんとの経緯、そして最近の美月ちゃんの様子などを話した。

美月ちゃんは最近どことなく不安定な気がするからだ。

急にはしゃいだかと思うと、いきなり怒り出したり、泣いたり・・・。

それが子供というものだ、と言われればそれまでだが、なんとなくだが

それだけではないような気もするのだ。

「さすがの俺も、幼稚園児のことはわからんけど・・・。」

あくまで俺らと近い年代のオンナたち、として見るなら

なんとなくわかるような気もする」

「それって何だよ？ 教えてくれ、沢田」

沢田は自分の分のコーラをゆっくり飲み干すと、一呼吸してから話し始めた。

「たぶんな・・・不安なんだよ」

「不安？ 不安って何が一体不安なんだよ」

「オンナってのはさ、恋をすると些細なことで不安になるらしいんだ。」

それは付き合ってもそうだよ。

そんなこと気にするほうがおかしいだろ？ってことまで勝手に気にして

勝手に不安になるんだ。で、急に怒ったり、泣いたりする。

なんつうのかな・・・情緒不安定っていえばいいのかな？

自分に対して確かな自信があるヤツは違うけど、そんなオンナそう多くはないだろ？

その美月って子のことは知らんけど、その子もたぶんお前とのことが心配で心配で

たまらなくて、そして不安になってしまっただろうな」

「・・・」

沢田に説明されたことは俺にもなんとなく理解できた。

そして納得した。

美月ちゃんはまだ幼いけれど、妙に大人びたところもある。だから、逆に心配で仕方ないのかもしれない。

「しかしなあ・・・」

女とまともに付き合ったことがないお前が、いきなり婚約しかも相手は幼稚園児とはねえ・・・。

「八八つ、悪いけど、ちょっと笑えてくるな」

沢田は笑いが零れそうな口元を抑えこむようにハンバーガーにかぶりついた。

「笑うなよ、沢田……。」

「情けないことを承知の上でお前に相談してるんだからよ」

「その子、可愛いのか？」

「ん？ ああ、可愛い子だよ。目がくりっとしてるし」

「だったらいつそ本気でその子との将来を考えたらどうだ？」

「……どういう意味だよ」

沢田は口に入れたハンバーガーを飲み込むと、実に愉快そうな顔で話し始めた。

「その子の側にいるようにして、お前の理想通りの女になるよう『教育』するんだよ。」

『源氏物語』の光源氏だっけ？ 同じようなことしてただろ？

「そうすりゃ、お前だけを一途に愛するようにすることだって出来るだろうし。」

「一つの実験として試してみる価値はあるかもしれんぞ？」

「そんないい加減なこと……できるわけないだろ！」

「いいじゃないか、試してみれば。」

「小さいうちはお前の『妹』として、成長したら『恋人』ってわけ」

だ。

「面白いだろ？」

「・・・そんなことできねえよ!!」

俺は両手でテーブルを思い切り叩いていた。

バンと鈍い音がし、衝撃で俺のコーラが倒れる。

賑やかだった周囲は一瞬静まり返り、何かと俺達を見ていた。

そんなことできるわけない、いや、しちやいけない。

美月ちゃんが・・・いや、美雨が可哀想だ。

「・・・わりい。ちよつとふざけすぎたな。

お前の昔のこと、忘れてたわ。すまん！」

沢田は俺が急に怒り出したことに驚いたようだが、

やがて少し悪ふざけしすぎたようだ、気がついてくれたらしい。

沢田は立ち上がり、周囲の人に軽く頭を下げた。

すみません、驚かせて。でも、何でもないですよ、と周りの客たちに伝えるためだ。

こういうところ、コイツはよく気が利く。

だから、女にモテるんだろうな。

そして、沢田は小走りで店員のところまで行くと、テーブルを拭くためにペーパーやタオルを

持って戻ってきた。

俺も一緒にテーブルの上を片付ける。

片付け終わると、沢田はイスに座り、改めて俺に向き合った。

「あれからもう・・・何年だったけ？俺にとってはもう昔のことだ

けど

お前にとっては今も忘れられないことだよな……。
そんなことにも気がつかなくて悪かったな」

「いや、いいんだ。俺も怒りすぎだよな。

こちらこそ悪かったな、沢田」

沢田に悪意がないことは俺にもわかっていた。

気の効くコイツのことだから、俺を笑わせようとしていたのかも
しれない。

「お前の妹の美雨ちゃん……可愛らしい子だったよな。

その美月ちゃんだっけ？その子と同じぐらいの頃じゃないか？

死……じゃない、天国に行ってしまったのは」

「そうだな……だいたい同じぐらいだと思う」

そう……

俺には妹がいる。

いや、いたのだ。

妹の美雨は6年前に事故で……死んだしまったのだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3910z/>

little honey

2012年1月10日00時47分発行